



～横浜市新市庁舎完成記念3館連携展示～

横浜都市発展記念館

〒231-0021 横浜市中区日本大通12
tel. 045-663-2424

近代横浜を掘る

洲千島からひろがる都市のすがた

2020年1月18日(土)～4月12日(日)

展示解説 2/2(日), 2/24(月・休), 3/29(日) 各回14:00～(30分程度)

横浜開港資料館

〒231-0021 横浜市中区日本大通3
tel. 045-201-2100

町会所から市役所へ 古地図と古写真に見る横浜の歩み

2020年2月1日(土)～4月19日(日)

横浜市歴史博物館

〒224-0003 横浜市中区中川中央1-18-1
tel. 045-912-7777

明治・大正ハマの街 新市庁舎建設地・洲千島遺跡

2020年4月1日(水)～7月5日(日)

展示解説 4/18(土), 5/2(土), 5/23(土), 6/20(土) 各回14:00～(30分程度)

※新型コロナウイルスの影響で休館やイベントを中止する場合があります。開催についてはHP等でご確認ください。

洲千島遺跡について発掘担当のkさんにインタビューしてみました

- 一番印象的だった遺構（建造物の跡など）や遺物（発掘で出てきたモノ）は何ですか？
- 15号建物基礎です。この遺構は後に横浜商品倉庫の弁天橋出張所であることが判明しました。この倉庫から震災時に保管されていた様々な陶磁器やガラス（写真）乾板がそのままの状態で見つかったからです。
- ガラス乾板ってフィルムではなくガラス板に画像が写っている写真のことですよね？もしかして何かすごく貴重なものが映っていたりして！
- うーん、それは展示をみてのお楽しみとしたいところですが、残念ながら、倉庫の物品だったので、撮影される前前のガラス乾板なのです。
- ズバリ、展示の目玉は何ですか？
- 沢山あるので限定しにくい難しい質問ですね。個人的には日英醸造のカスケードビールの瓶でしょう。ごく限られた時期にしか作られていなかったものですが、瓶の製造方法が異なる種類もあることがわかっています。

《埋蔵文化財センターのご案内》

利用案内
平日：9～17時（イベント時を除く）
（団体利用：事前申込）※栄区郷土資料室併設



アクセス

- JR 根岸線「港南台」駅**
2番バス乗り場より神奈中バス「上郷ネオポリス」行きまたは「大船駅」行は「栄プール」行きに乗り、上郷ネオポリス下車徒歩1分
- 京浜急行線「金沢八景」駅**
金沢八景駅前3番乗り場より「上郷ネオポリス」行き、終点「上郷ネオポリス」下車徒歩1分または神奈中バス「大船駅」行きに乗り、「長倉町」下車徒歩7分
- JR 線「大船」駅** 行きに乗り、「長倉町」下車徒歩7分



埋文よこはま 41

発行日 2020年3月27日
編集・発行 (公財)横浜ふるさと歴史財団
印刷 埋蔵文化財センター
株式会社ナデック

『埋文よこはま』は横浜市内で発掘調査された遺跡や出土した遺物を紹介する広報紙です。市内の学校・図書館・区役所などで入手することができます。バックナンバーについては埋文センターHPからもダウンロードが可能です。

関連イベント

- 連続講座
「洲千島遺跡を読み解く」
各回14:00～15:30
第3回(5/10) (in横浜歴史博物館研修室)
「近代横浜の衛生管理：遺物にみる上水」
第4回(6/14) (in横浜歴史博物館研修室)
「近代横浜の衛生管理：遺物にみる下水」

歴史散歩

「ヨコハマ近代遺跡めぐり」

第1回(3/20)、第2回(5/17)
13:30～16:00
集合場所：横浜都市発展記念館1階ギャラリー

講演会

「横浜」と近代遺跡」

6/7(日) 14:00～15:30
横浜歴史博物館講堂

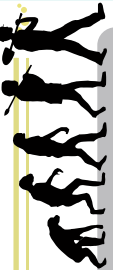
※事前申込が必要です。
詳しくは横浜歴史博物館ウェブサイトをご覧ください。

編集後記

今回のテーマは再び貝塚です。歴史好きの方は、貝塚という縄文時代のイメーজをお持ちではないでしょうか。確かに発掘して貝塚が出てくるのは実際に縄文時代が多いのですが、現代でも私たちの周りには貝殻が散らばっている貝殻は時代を問わず採取された自然の恵みです。縄文編に引き続き、春の潮干狩りシーズンの出かけの参考にしていただければと思います。編集N



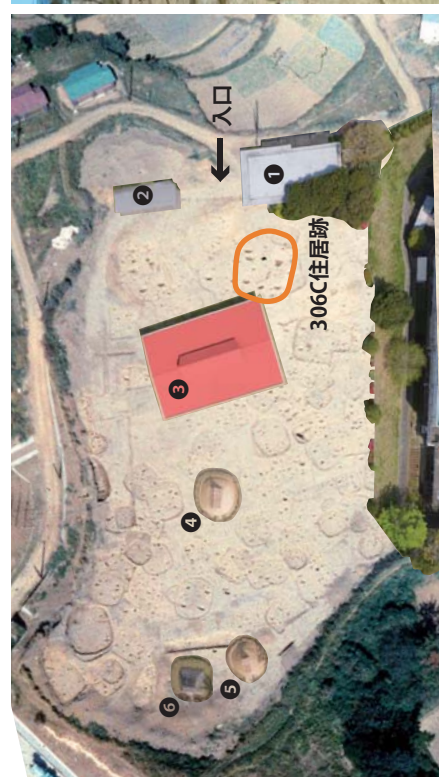
※貝殻は「貝殻」ではなく「貝殻」です。



埋文よこはま

横浜の貝塚② 弥生時代～近代編

貝塚の時期



上段左：三殿台遺跡全景

発掘時の全景写真に現在建っている建物を合成したもの
①展示室・収蔵庫・管理事務所 ②パーゴラ ③住居跡保護棟
④～⑥復元住居(④：弥生時代中期宮ノ台式期、⑤縄文時代中期加曽利E式期、⑥古墳時代後期鬼高式期)

提供：横浜市三殿台考古館

上段右：三殿台遺跡306C住居跡全景

↓は下の写真の柱穴を指す

下段左：三殿台遺跡306C住居跡の柱穴にみられる貝層



三殿台遺跡では住居跡をこんな風に木杭で表しているよ。
306C住居跡を探してみよう！
(中央の木杭で囲われた住居が306C)

貝塚という縄文時代をイメージすると思いますが、縄文時代以外の時代にもみられます。なぜなら、広い意味で貝類を廃棄した所を指すからです。世界中にある貝塚ですが、時代もまた問わずにみられるものなのです。今号では横浜地域にみられる貝塚の中でも、縄文時代より新しい時代の貝塚に注目してみたいと思います。

上の写真は磯子区三殿台遺跡の306C号住居跡の柱穴にみられる貝層です。三殿台遺跡は大岡川流域の標高約55mの台地上に立地しており、現在、国の指定史跡として公開されています。縄文時代から古墳時代にかけての集落跡で、306C号住居跡は弥生時代中期後半の宮ノ台式期に造られた、長径13.70m、短径11.80m、床面積約133.7㎡(40.44坪、86.36畳(江戸間))の大形住居です。この住居の柱穴にマガキやハマグリ、アサリを主体とした貝層が形成されていたのです。貝層中には、イノシシやシカの下顎骨、鹿角なども多く含まれています。この住居は焼失住居(火災にあった痕跡がみられる住居)ですが、貝層の上面が床面と同じように焼けていたことから、人が住まなくなった後の住居に貝を捨てたのではなく、住居が焼ける以前からすでに貝殻が柱穴に埋められていたと考えられています。

※横浜の貝塚①は「埋文よこはま」37号をご参照ください。





どんな貝を採って食べていたの?～横浜市内の貝塚あれこれ～



弥生時代 the yayoi period

弥生時代の貝塚は、縄文時代ほど大規模なものはありませんが、貝塚は形成されます。溝や住居跡の一部、集落のはずれなどにごく小規模に残されています。また、西日本以南の地域に多く、関東以北では少ない傾向にあります。

採集された貝種をみてみると、縄文時代に比べて減少しますが、ハマグリ、アサリ、サザエ、アカニシなど、現代の私たちが美味しいと好んで食べるような種類が選択されます。特に、三浦半島では弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、大型のアワビが多数出土し、潜水漁の可能性が指摘され、アワビおこしなどの道具もみつかります。波のしんよく かいしよく せんすいりょう ぞうしゅうけつ 浸食で崖が削られ形成された海蝕洞穴を人々が利用し、専業的な漁撈集団がいた可能性が指摘されています。

横浜市内では、前頁で紹介した磯子区三殿台遺跡の他に、鶴見区上台北遺跡で、弥生時代後期の竪穴住居跡からマガキやハマグリ、シオフキ、アカニシなどの内湾性の貝類が検出されています。同じく鶴見川流域に位置する港北区らうじりだい 区らうじりだい 牟根台遺跡からは弥生時代中期の環濠の上層に堆積した貝塚で、ハマグリ主体の貝層が検出されています。また、同河川流域の環濠集落である都筑区折本西原遺跡からは弥生時代中期後葉の溝で区画した墓である方形周溝墓 ほうけいしゅうこうぼ おりもとにしほら 主体の貝ブロックが住居の柱穴から検出されています。またこの遺跡からは、前頁の三殿台遺跡と同様に、マガキ主体の貝ブロックが住居の柱穴から検出されています。

このように横浜市内では、この時期、住居内貝層を中心とした小規模な貝塚から、内湾干潟種を中心とした貝類が出土します。三浦半島の海蝕洞穴でみられるアワビなどの大型の岩礁性貝類はほとんど見られませんが、らうじりだい 区牟根台遺跡からは弥生時代中期の環濠の上層に堆積した貝塚で、ハマグリ主体の貝層が検出されています。また、縄文時代の特に前期の貝塚にみられる温暖種のハイガイも検出されません。横浜市内では縄文時代の貝塚のほとんどが台地上の遺跡からみつかりますが、この時期、低地からも貝塚が検出され、海退とともに低地にも生活の場が広がっていったことがわかります。

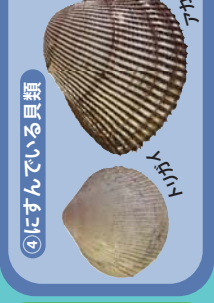
貝の生息域

縄文時代とは異なる貝の生息域にも注目しよう

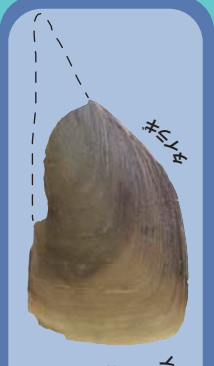
水域	沿岸水	内湾水			
どんなところ	湾の外側	湾中央部	湾奥部	河口	
海底の様子	岩	砂や泥	砂	シルト～泥	砂や泥
潮間帯 潮の満ち引きにより、潮がひいたときに海底が現れる場所のこと	9 海中に隠れている岩の上 上部浅海帯 陸に近い水深20m程度までの海域	3 砂がたまった内湾部	2 干潟（潮の満ち引きで水面から出たり入ったりする砂と泥の場所）	1 感潮域（潮の満ち引きによって水の深さが変化するところ）	
	8 海中に隠れている岩のある外海	6 砂や小石がたまった湾口部	7 海藻・海藻が生い茂る場所	4 泥がたまった内湾部	
	5 海中に隠れている岩場の				



②にすんでいる貝類



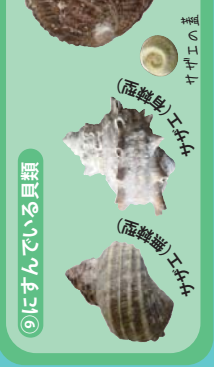
④にすんでいる貝類



⑤にすんでいる貝類



⑥にすんでいる貝類



⑦にすんでいる貝類



縄文時代の貝塚からは②や③の貝類が多く見つかるよ。弥生時代からはそれ以外の貝類も多く採られるようになるよ。貝の種類の違いから、貝をとる技術の向上や貝の生息する海の環境変化なども考えられるんだ。



写真中央の影になっていろいろくぼんだ場所が大浦山洞穴です（標高約30m）。

三浦半島では②や③以外の、特に外洋の沿岸に棲むアワビやサザエなんかが多く見つかるよ。ちなみに魚類でもカツオやサメ類、マダイなどの外洋域に生息するものが獲られるよ。



アワビおこしとはアワビを岩から剥ぎ取るための道具です。



左端が鹿角製の
アワビおこし
(長さ13.8cm)



左上:三浦市大浦山洞穴の遠景(1930年代)
右上: 同上 出土の骨角器
左下: 同上 出土のアワビ貝殻片
右下:三浦市野沙門6洞穴出土のアワビの貝製品

提供: (左) 横須賀考古学会 (右) 中村 勉氏



縄文時代の貝塚では、住居内に廃棄される住居内貝層も住居の凹みの大部分にみられるなど、規模の大きいものがあったよ。弥生時代ではこうした小さな貝層が多いよ。



左上:上台北遺跡2号住居跡焼土・貝層検出状況
右上:上台北遺跡2号住居跡貝層断面
左下:上台北遺跡出土の貝類
右下:上台北遺跡の貝層取り上げ作業風景



どんな貝を採って食べていたの?～横浜市内の貝塚あれこれ～



古墳時代～古代

from the kofun period to the nara and heian period

古墳時代から古代にかけての集落遺跡から出土する貝層は、自家消費的な小規模な貝層が多く、貝種は前時代に引き続き限定され、ハマグリやカキなどの

の美味しい貝類が多く出土します。また弥生時代以降、水田の発達に伴い、イシガイやタニシなどの淡水性の貝類が増加し、これらが主体の貝層も形成されるようになります。その他、ウミナ類が多く出土するのもこの時期の特徴です。古代では、アワビなどは税として大和朝廷に貢進されるため、潜水によるアワビ漁の専業集団も出現します。

横浜市内から、弥生時代後期末ないしは古墳時代前期にかけての貝塚はいくつか検出されています。磯子区**峯遺跡群**や同区**杉田東漸寺貝塚**からは内湾砂底種や内湾干潟種(P2・3、P7の②や③)を中心とした貝類が出土しており、イボキサゴやアサリ、マガキ、ハマグリ、シオフキなどがみられます。**杉田東漸寺貝塚**では人為的な廃棄とみられる貝層と自然貝層の両者がみられます。前者では小型のハマグリやシオフキは検出されず、後者では小型から大型のものまで見られます。これは、採集の際に比較的大きなものを採るというサイズの選択があったと考えられます。

鶴見区No.85遺跡(鶴見神社貝塚)でも弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての貝層が形成され、カガミガイやハマグリ、イボキサゴなど、やはり内湾性の貝類が検出されています。この遺跡は鶴見川河口の標高4mの沖積低地につくられた低地貝塚ですが、鶴見川の東岸にはこの他にも川崎市市場A・B貝塚、川崎市浅野造船所水道水源地貝塚、川崎市八丁廢貝塚など、古代の低地貝塚はいくつか見られます。

古墳時代中期の金沢区**瀬戸神社旧境内地内遺跡**からはマガキを主体に、ハマグリ、アサリ、シオフキ、マテガイなどの貝層がみられます。同区からは市立金沢高校内貝塚、諸口貝塚、金沢八幡社貝塚、称名寺貝塚など、弥生後期から古墳時代、古代の貝塚がいくつも見つかっています。これらの遺跡からはマガキやハマグリ、アサリなどの瀬戸神社旧境内地内遺跡と同様の貝類が出土しています。また、鶴見川流域と同様、低地や砂丘上に形成される貝塚もみられます。

基本的には、内湾砂底群集で構成され、最も近い浜での採集が想定されていますが、外洋に面した沿岸沖合の砂礫底や岩礁に生息する貝類(P2・3、P7の⑨)も出土しており、広範囲な活動が考えられています。こうした湾の外での海産物の捕獲が弥生時代以降増加します。



現在の展示状況



杉田東漸寺貝塚の貝層断面

左の貝層は剥ぎ取った実物が埋文セーターに展示してあります。当時の人々が捨てた貝層と、自然貝層の両方が一緒にみられる貴重な剥ぎ取り標本です。露頭にみられる貝化石層などをご覧になったことがある方は、貝塚と自然貝層はどう違うのか、どこで判断しているのか疑問に思われた方もいることでしょう。ぜひ見てご確認ください。



こんなふうにして剥ぎ取りました



01



02



03

←市立金沢高校内貝塚の貝層



横浜市内からみつかると古墳時代から古代の貝塚では、弥生時代に引き続いて、P2・3で紹介した②・③に生息する内湾砂底種が多くでるよ。高台以外にも低い土地からも貝塚がみつかることも増えてくるよ。

←鶴見区No.85遺跡(鶴見神社貝塚)の貝層検出状況
(2トレンチサブトレランチによる精査後風景)



瀬戸神社旧境内地内遺跡には、基盤となる上総層群野島層が海進の侵食によって形成された埋没波蝕台がみられます。波蝕面には、海面が往時、その高さにあった際に生息していた穿孔貝による巣穴の痕が、生痕化石としてみられます(右写真)。

穿孔貝(boring shell)とは、岩石や材に穿孔するという習性をもつ貝のことで、自ら岩石等の内に穿孔し、その中で成長します。この穿孔貝が生息する条件としては、潮間帯であることや泥岩や砂岩、凝灰岩などの比較的柔らかく穿孔しやすい岩石であることなどがあげられます。

穿孔貝の代表的なものにセミアサリやイシマテガイ、カモメガイなどがありますが、こうした穿孔貝の痕跡は遺構にもみられ、鎌倉市の長谷小路周辺遺跡の古墳時代後期とみられる石棺墓に使用された泥岩のなかには、ニオウガイの仲間の生痕化石をもつものもみられます。



これは穿孔貝ではなく、トマヤガイ



現在の瀬戸神社に残る波蝕台



神奈川県三浦市城ヶ島にみられる波蝕台

どんな貝を採って食べていたの?～横浜市内の貝塚あれこれ～



中世・近世

the middle period and the early modern period

中世都市鎌倉ではアワビやサザエ、アカニシ、ハマグリ類が多く、またサイズも大きく規格が揃うものが多いことから、近隣の漁村から選択的に持ち込まれたと考えられています。鎌倉に持ち込まれたこれらのアワビやサザエは三浦半島などの岩礁域から、アカニシやハマグリは東京湾方面から搬入されたものと推定されています。一方、漁村では、小型や

規格外のもの、ハマグリやキゴゴ類、アサリ、カキ、シジミなどの内湾や河口域で採集されるものが多く出土しています。

近世では、中世鎌倉にみられたアワビ、サザエ、ハマグリは引き続き多く消費されますが、アカニシは近世の後半には減少していきます。また近世には鎌倉では稀であったアカガイが増加します。数は少ないですが、タイラギやトリガイなどもみられるようになります。これらは湾中央部の泥底、東京湾の深場に生息します。それゆえ、「桁網」などの底曳漁業の導入が示唆されています。また、東京都港区の雑魚場跡からはバカガイを主体とする大規模な貝層が発見され、主に剥き身(特に貝柱)として流通していたことが文献に記載されています。バカガイは縄文時代の貝塚からはほとんど出土せず、またアカガイについても縄文貝塚からはあまり出土しません。アカガイなどの内湾泥底群集(P2・3、P7の④)は縄文海進前期から最盛期にかけて各地に形成された溺れ谷型内湾の湾中央部から湾奥部の泥底に広く分布しますが、海退になると、内湾の縮小と砂層域の発達により、泥底の残る湾中央部だけに生息域が狭められたことによるものと思われます。また、アサリは鎌倉では稀で、アサリやシジミなどの現代人になじみのあるこれらは、近世でも時代が下るにつれて増加する傾向にあるようです。アサリの増加は近世以降の人為的要因による内湾環境の変化が要因とも考えられています。

鎌倉に隣接する横浜地域の遺跡出土の貝類をみると、金沢区上行寺裏遺跡からはアサリやマガキを中心とした中近世の貝層が検出されています。特にマガキの右殻(蓋)の閉殻筋(貝柱)部分には、刃物等で傷をつけた剥き身痕がみられます。アサリやマガキなどを集中して採取し、加工したことによりついたものとみられています。鎌倉などの消費地の加工であったのでしょうか。マガキの剥き身での流通も考えられています。またアサリも一定量出土していることから、同様に流通にのっていたとすれば、これも剥き身での流通が考えられます。また金沢区瀬戸神社旧境内地内遺跡でもサイズの揃った大きなマガキが大量に出土することから、養殖したマガキが持ち込まれたものとみられています。



近代

the modern period

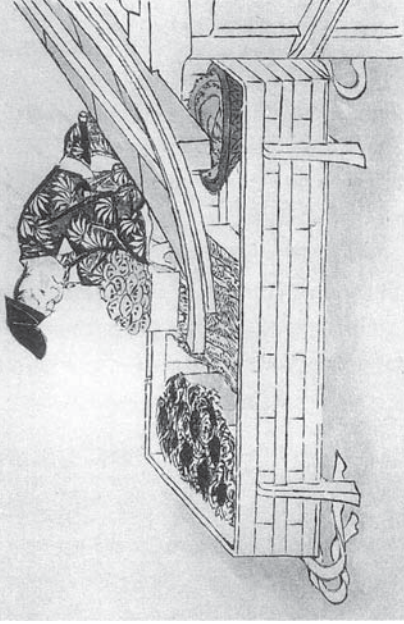
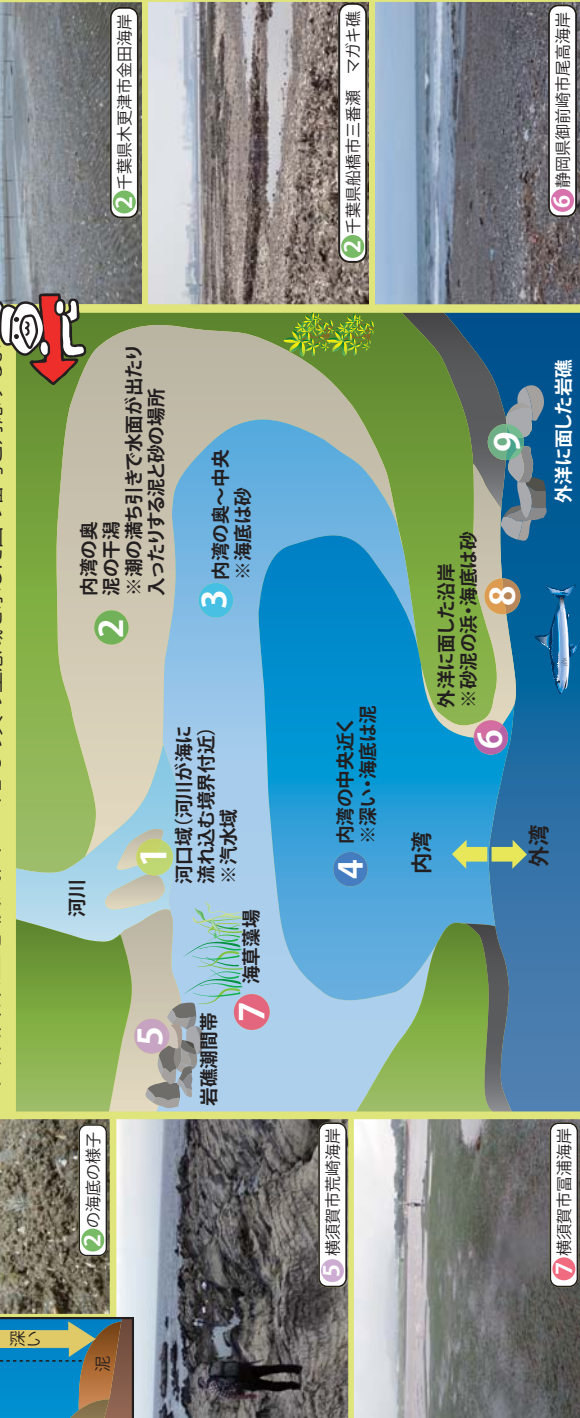
近代遺跡の貝層の検出事例は少ないものの、中区洲千島遺跡ではバイの貝溜まりが検出されています。バイは食以外の用途に使用されることもありました。江戸時代にはこの貝に砂や鉛をつめて、独楽として使われていました。今でも関西ではべーごまのことをバイと呼んでいます。「ばいごま」がなまり、「べーごま」になったと言われています。このバイを使用した独楽は、大正時代まで続きました。洲千島遺跡から出土した貝類は独楽に使用するため殻口部などの下半部を切断したような加工は見られませんが、こういった用途も考えられます。

右図: 描かれた魚貝類『石山寺縁起』横写
※左端がガザミ、その右は魚(種類不明)、男が持つ箱の貝はハマグリラしい、右端の鉢の中はタコ。
『新版絵巻物による日本常民生活絵引』より転載



上段 左: 上行寺裏遺跡(瀬戸14番地やぐら群)7・8・9号やぐら 右: 同左 遺跡7・9号やぐら第1貝層堆積状況 上段左右・下段左: 神奈川県教育委員会所蔵
下段 左: 同上 遺跡出土の剥き身痕のあるマガキ右殻(裏面) 右: 瀬戸神社旧境内地内遺跡1貝層のマガキ純貝層

貝類群集生息模式図 P2・3の貝の生息域を示した図の番号と対応するよ



時代別・貝塚の変化

縄文時代: 内湾干潟種中心
弥生時代: 貝種の限定、アワビ漁などにみられる専門的集団(三浦半島)
古墳～古代: 貝種の限定、採取活動の広範化(外湾域)、貝塚の立地が低地へも広がる
中世・近世・近代: 流通ベース(都市へ商品として貝類が流れる(剥き身))、都市ではサイズや種が限定され、郊外では内湾や河口域の貝類の利用